

## 6. 遺物研究

### 再興九谷焼・春日山窯の製品について

—金沢大学宝町遺跡出土品と暁烏コレクションから—

佐々木 花江

金沢大学埋蔵文化財調査センター

#### はじめに

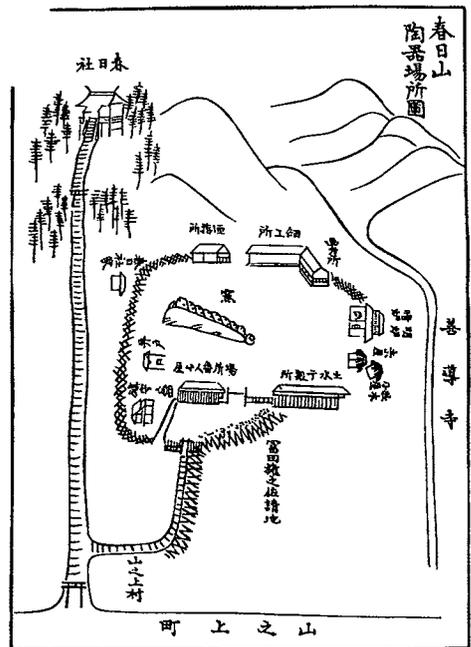
金沢大学埋蔵文化財調査センターは、加賀藩与力町であった宝町キャンパスで発掘調査をおこない、当時の生活に使われていた再興九谷の製品を多数得ることができた。再興九谷の製品は、その窯がいくつか知られているものの考古学的な製品の研究は遅れている。その理由として、新しい時代の地方窯であり再興九谷窯としては全国的に知られていないこと、日本海交易で日本海沿岸に運ばれたというもののその出土例がほとんど知られていないこと、明治以降は輸出が盛んであったことが知られているが日常生活道具としての生産例が限られていることなどがあげられる。この点で、多数出土した宝町遺跡の再興九谷焼の製品は、当時の生産の状況や流通の様子を知ることができる重要な資料である。

春日山窯は、再興九谷焼として最初に成功した窯である。しかしながら知られている伝世品が少ないことから特別に注目されることも無く、考古学的にはその価値がまったく知られていない。宝町遺跡附属病院地点出土のたくさんの再興九谷焼の中に5点の春日山窯製品があり、再興九谷焼にくわしい石川県立歴史博物館の北 春千代氏に鑑定を依頼して確認できたのでここで紹介したい。

#### 春日山窯について

2003年に九谷焼考古学研究会で春日山窯の踏査や伝世品の調査をおこなったことは、佐々木達夫が「春日山窯跡の踏査」(『金沢大学文化財学研究6』2004)に記している。「春日山陶器場所図」にあるかつての窯場の敷地であったと考えられる部分には、現在住宅が建ち並んでいる。しかしこの敷地周りの道路は現在でも使われており、窯場の広がりやを推定することができる。かつての道路が変わらずに今日も残っているのは、この辺りは卯辰山の山裾で細かな多数の谷が入り組む高低差の大きなところで、大規模な造成がなされないままに昔の地形が保たれたためである。窯場推定地の東側道路際には「金澤九谷陶宗木米窯跡」の石碑があり、金沢市教育委員会による立札もある。

春日山窯開窯については、加賀藩士富田景周の箕柳祇碑文や加賀藩士津田左近右衛門の『政鄰記』、金沢町年寄の亀田純蔵の「唐津金府起本」から知ることができる。これらによると、金沢には前から大樋など楽焼類があったが堅



春日山陶器場所図

(和田文次郎編『稿本金沢市史工芸編第一』

1925年、金沢市)

焼日常雑器はすべて他国から入ってきた。遠路からの運送料も加わり、支払いは過分になってきた。当時尾張などでもだんだん質のよい陶磁器を生産するようになり産業となった結果、国中でこの焼き物を生業とする者が多くなった。金沢でも同様に国内で陶磁器の生産ができるようになれば、国外に大量に流出する金銀を国内に留めることができ、貧しい者も賃仕事で潤うことができると考えた。このため文化3年(1808)に京都の青木佐兵衛(木米)が呼ばれ、卯辰山の土を用いて卯辰山の瓦師平兵衛の窯で試し、よい結果を得ることができた。そして藩営での春日山窯は、本多貞吉と共に山の上村で開窯した。しかしながら文化5年正月に金沢城二の丸が焼失。経済的問題から民窯に移行される。同年木米が京都へ去り、文化8年に貞吉が若杉窯に移ってからは衰退し、文政元年(1818)頃に廃窯となったという。春日山窯は10年間ほどしか稼動していない。木米と貞吉の他、越中屋平吉、任田屋徳右衛門らが従事し、赤絵や青磁、染付の日常生活雑器を生産した。銘には「木米」「金城製」「金城文化年製」「金府」などが知られている。文政5年に加賀藩士武田秀平が春日山窯の廃窯を惜しみ開窯した民山窯は、春日山窯を復興したのか近隣に築窯したのか不明ながら、弘化元年(1844)まで続き、「民山」の銘を用いたという。



「金澤九谷陶宗木米窯跡」の石碑

### 宝町遺跡出土の春日山窯製品

加賀藩時代には与力が住んでいた所で、金沢大学附属病院の前身の石川県金沢病院が明治38年(1905)に新築移転するまでは住宅街であった。宝町遺跡出土の春日山窯製品は、染付碗1点、赤絵碗1点、手付き陶器鉢2点、手付き陶器鉢の取手と考えられるもの1点、全5点である。ゴミ穴などから割れて出土したもので、どれも日常の生活で使われていたものと思われる。

#### 1. 染付草花文碗 「金城／文化／年製」染付三行六字銘

煎茶碗で、比較的白い磁胎であるが、透明釉のせいで器面はねずみ色がかって見える。口縁の内外と外面腰部に円圈を廻らし、見込みと外面には骨描きの内側を濃筆で埋めた草花文を描く。高台内に「金城／文化／年製」銘が染付で書かれている。癖のある速筆である。

北氏によると、磁胎であり、春日山窯の初期においては、江沼や能美あたりの陶石を使用したも



KTB9904-9919

口径 8.6 cm

高台径 2.1 cm

器高 4.6 cm

のと考えられる。「金城文化年製」銘は、必ずしも文化年間に焼造されたとは限らないが、一連の銘の書体から文化年間、春日山窯の稼動した初期の頃とみることができ、とのことである。

同じ手の碗が安江町遺跡からも出土している（『安江町遺跡』SK219 NO. 430. 1996 金沢市）。

## 2. 赤絵草花文碗 「金城／製」赤書二行三字銘



煎茶碗で、比較的白い磁胎である。赤絵の具で口縁の内外や外面腰部に円圈を廻らせる。見込みには円の中に草花文をひとつ、外面には三方に草花文を描く。赤色で主に文様を描いているが、草の葉は緑色で書き加えている。赤色はほとんど剥げていないが、緑色は剥離のため色のあった痕跡をとどめている程度である。絵柄は簡略、器面に降灰が見え、窯の技術と質がうかがえる。高台内に「金城／製」と赤色で書かれている。やはり速筆で、染付草花文碗に良く似た字体である。

北氏は、「ごく簡単な呉洲赤絵の作風と見てよいだろう。「金城製」銘の「金」字の最後の一画が長いこと、春日山窯の初期で青木木米作といわれる石野龍山旧蔵の「染付山水図徳利」胴部銘や、寺島応養旧蔵の「乾泉亭」陽刻の「青磁花生」底銘の書体と酷似し、これもまた春日山窯初期の製品と考えられるものである」という。

## 3. 白釉手付き鉢



肌色の明るい赤褐色の胎土で、軟陶の素地である。手付部や内面、側面に白釉をドブがけしており、高台部分は露胎をみせている。高台は大きく、畳付は整形されずに平らで太い。

北氏は、「表面の左下に「金」「城」銘を、それぞれ一重角内に書いている。この形式の銘も青木木米作といわれる石野龍山旧蔵の「染付山水図徳利」胴部銘や、加賀藩年寄衆の本多家旧蔵の「染付唐子山水図徳利」胴部銘にみられ、鉄釉と染付との違いはあるにしても、同時期に作陶されたものと思われる。ちなみに寺島蔵人邸跡の所蔵で、鉄釉による文化丁卯（4年＝1807）「乾泉亭」文

字入りの「猪口」、同「小蓋付碗」、同「蓋付碗」に技法や土味が酷似し、従って春日山窯初期を飾る手付鉢といえよう」とのことであった。

#### 4. 鉄釉手付鉢 「金城／東山」 四方形押印銘



KTB98-13723

口径 7.2 cm

底径 7.8 cm

器高 13.0 cm

荒い素地である。鉄釉を全面にかけ、白い化粧土を刷毛塗りして景色を作っている。底部は無釉で、糸切痕が底を平らにしている。整形はうまいとはいえないが、これも茶人の好む自由さであろうか。腰に「金城／東山」の押印銘がある。この「金城東山」印は正方形の外枠が胴張りとなり特徴がある。北氏は、「尾張藩の城下の屋敷で金城東山焼という御庭焼が天保年間に操業されたが、その手の印とは違う。この鉄釉鉢の「金城／東山」四方形押印は、金沢の明治時代初期の上絵画工である山田久録の「久録画」の署名と平行して用いられており、「卯辰山焼」の名で整理されるものである。ちなみに「金城東山」一行四字印の形式の印もあり、これには「兔」が立っている図に、「山」字が同時に施され、「兔」→卯、立っている→辰、山字などから、「卯辰山」を意味し、「卯辰山焼」の根拠になっている。しかし青木木米が瓦師平兵衛の窯で試焼きを行った際、平兵衛の「金城東山」印を借りて使用したとの伝えもあり、従って瓦師平兵衛、あるいは青木木米の作で一部「金城東山」印の使用の可能性もある」と御教示いただいた。

#### 5. 鉄釉「金城」銘把手部分 「金城」鉄釉銘



KTB9904-10257

径 1.2 cm

手付鉢の取手部分で、鉄釉で「金城」銘が書かれている。北氏は、「金」字の最後の一画が長く、「赤絵草花文碗」銘や、石野龍山旧蔵の「染付山水図徳利」胴部銘の書体に共通し、また鉄釉と白釉の使用が寺島蔵人邸跡の所蔵で、鉄釉による文化丁卯（4年＝1807）「乾泉亭」文字入りの「猪口」、同「小蓋付碗」、同「蓋付碗」にもあることから、春日山窯の初期の一例と考えられる」とした。

## 暁烏コレクションにある「金城／製造」銘の皿について

筆者は、科学研究費基盤研究（C）「殖産興業としての再興九谷焼の資料化と消費遺跡からみる九谷焼の流通」の研究の一作業として、金沢大学が所有する暁烏コレクションのうちの九谷焼を実見した。その中に「金城／製造」銘を持つ大皿があり、銘から春日山窯の製品かと考えていた。今回北氏に写真を見ての御感想をうかがうと、以下のようであった。

- 1、表面 余白部の赤の細描が気になる。
- 2、赤の絵の具や、紺青・紫など、春日山窯の絵の具の質と異なるように思われる。
- 3、銘は、「金城／製造」（しんにゅうの上が点2個）でないかと思われる。
- 4、銘の角が入隅となっていて、今まで春日山窯の作品では見たことがない。
- 5、全体に筆法が硬いような感じがする。
- 6、「木米」銘で、明治以後の偽物をこれまで沢山みてきたが、その手に近いように感じられる。

あくまでも写真での印象をお聞きしただけであるが、春日山窯の可能性は低いようである。径40cmほどの大皿で、日常の生活で使うには重過ぎる。また、皿の表にも裏にも細かく描かれた絵柄から、実際に使うよりも装飾品としての目的が適していると納得する。



金沢大学資料館蔵 再興九谷「金城／製造」銘色絵大皿

## おわりに

春日山窯は10年ほどの短期間の窯であったが、京都から木米や貞吉を呼んでその成功が大いに期待された窯であった。金沢市内の遺跡からも宝町遺跡出土品と同じ速筆の絵柄の碗が出土しているところを見ると、大量生産品として作られていたことが想像される。その意味では宝町遺跡出土の品々は、再興九谷焼初の磁器生産をした春日山窯が自国の庶民向け日常品を作る目的での開窯であったこと、そして目的どおりに実際に日常生活に取り入れられていたことを証明するものである。全国的な流通には及ばなかったが、わずか10年間しか稼動しなくとも当初の目的を遂げていることに注目したい。

一点ものは遺跡からはなかなか発見されない。伝世品の中にも春日山窯といわれるものを見ることが多いが、後の時代の習作であったり陶工の技術の挑戦であったりする作品のほうが多い。春日山窯の生産状況から、一点ものを作るほどに成熟した時間がまだ来ないうちに廃窯になってしまった可能性がある。末筆ながら、御指導いただいた北 春千代氏に深く御礼申し上げる。